前略

お元気でしょうか。このご時世に手紙なんてと笑われるかもしれませんが、どうぞご容赦を。
今日は前にお話しした、私の数少ない友人の話をしたく思って手紙を書こうと思いました。お付き合いくだされば幸いです。
そうですね仮にHと呼んでおきましょう。Hは私と同年代の大学生でした。
私は東北から上京してきた田舎モノでありまして、右も左も、いや当時は上も下もというぐらいこの都会の喧騒と輝かしさに驚かされ、戸惑わされていたのです。
そんな中、大学に入学したばかりの時分に新入生への説明会がありました。見知っている人もいない、知っているのは自分だけ・・・そんな環境下での新入生説明会でありましたので、座っているだけで足腰が痛くなる、冷や汗が出る・・・どうしようもない緊張と不安に包まれていました。
そんな私の隣に座っていたのがHでした。
彼は私とは対照的にどこ吹く風というほうほうの体で椅子に身体をあずけていました。ただなにやらぼうっと一点を見つめているようでありました。そのまなざしも時に鋭くなるのでした。時たま腕を組んだり、ため息をついたり、指先でリズムをとったり・・・その彼の不思議かつ不安定な動作一つ一つに興味がわいてきたのでしょうか、どうにも緊張していた私は無意識のうちに彼を観察しはじめていたのでした。
説明会と言っても周りを見渡せばそこかしこで人々が話し込んでおり、ちょっとした喧騒の賑わいをみせていました。壇上で新入生に向けての説明をしている事務員の方はこれといってこの喧騒に注意をすることもなく、淡々と事務的要綱をつらつら述べているだけでありました。
その中で、Hが視線を向ける先は、壇上の事務員ではなく、壇上の大きな黒板でもなく、教室の外で待機している無数の大学生(サークル勧誘のため)でもなく、ただHの前に座っている小柄な女の子に向けてでした。
その女の子の、頭部でしょうか、に向けて彼はただならぬ視線を向けているのでした。この喧騒の中で彼の視線を追う人間など、私だけでありましたが、誰が追っても彼の視線の先にあるのはこの小柄な女の子の頭部でありましょう。
はてさて私も視線を追ってみましたところ、その女の子の頭部にはなんら異変も感じられませんでした。なにかが付いているわけでもなく憑いているわけでもなく・・・なにが彼の視線を釘付けにするのかまったくもって見当がつきませんでした。彼だけに見えるなにかがあるのか、それともただぼうっと見ているだけなのか・・・
壇上の事務員の方が説明を終え、皆に解散を言い伝えようとしたちょうどそのとき、Hが前傾姿勢に入ったのを視界に捉えました。
そのときの彼の動きを今思い出そうとすると、どうしてもスローモーション再生をするのです。実際の彼の動きはコン0秒にも満たない速さ。どうにも私の脳は彼の動きを認識できなかったのではないでしょうか。
私がはっきりと彼の姿を認識したとき、Hは前列の、視線を向けていた少女の頭部を思い切り、
—引っ張っていました。
そして、声高らかに叫びました、
「こいつは正義じゃねぇえええええええ！」
その少女の頭部、もとい髪型にHは興味をもっていたのでしょう。その子の髪型は長髪を二つの束に分けた、そう「ツインテイル」なる髪形でありました。その二つのおさげを両手で掴んだ彼は思い切り引っ張り、声高らかに再度叫びました。
「こいつは正義じゃねぇえええええええ！」
一瞬の静寂。誰もが口を閉じる。百を越える目線。注がれる一点。
「このツインテールは正義じゃねぇんだよおおおおお！」
思い切り自分のおさげを引っ張られ、奇声を浴びせかけられた少女は自分の身に起きた事象に呆然とすることコンマ0秒。やがて顔がみるみるうちに紅潮し始め、
「・・・ぎゃあああああああああああああ！」
これまさしく断末魔の叫びと形容すべき絶叫を上げ卒倒。
そして、この奇想天外を1メートルも満たない脇で目にした私も、抱えていた緊張と不安の爆弾に耐え切れずもあってか視界がブラックアウト。最後に見えたのは大学職員に押さえ込まれるH、耳にしたのは喧騒の炸裂であったのです。

それから偶然が重なり合ってか、運命の導きであったのか、ここでは割愛をさせていただきますが私とHは互いに友人と呼べる関係になっていきました。

正直、今でもなぜ彼と友人関係を築くことができたのか、甚だ不思議で仕方がないのですが、流れに身を任せるといいますか、時の流れに身をまかせて(テレサ・テ〇万歳)いたらそうなっていたのです。田舎モノの私にとって彼の所業の数々はおもしろおかしいもの、興味深いもの、新しい何かであった気がしてなりませんでした。

しかし彼との大学生活は先に申し上げたとおり、私にとってはおもしろく、興味深く、奇想天外で愉快なものでした。

彼は大学に入学して早々、先の「ツインテール事件」を起こし、大学内での要注意人物S級クラス対象に認知され、日々事務員や警備員、「大学自警団」(実態は不明)に目をつけられる始末でした。しかし本人はいつもどこ吹く風の能天気な体で大学を練り歩き、何かしらの問題を起こしていきました。

ある日、教室の大黒板びっしり数式なのかプログラム言語なのかよく分からない文字列をびっしりと書き込み教員を驚かせたことがあります。一人のお偉い教授がその文字列の解読に必死になり、その教室での行われる講義がすべて休講になったことがありました。教授は「こいつは複雑怪奇ッ！」と教室で夢中になって解読をしていたそうなのですが、大学側は「貴様が複雑怪奇だ」と言わんばかりに教授を教室から引っ張り出し、黒板清掃を始めたそうなのですが、チョークではなく白いマジックか何かで書き込んだため容易に消すことができず、黒板を交換する羽目になったそうです。そのおかげで数日間教室は閉鎖となり、いくつかの授業に休講が言い渡されました。

「数式事件」の主犯であるHは即刻大学に呼び出しをされ出頭したそうですが、解読に夢中になった教授が仲裁をしてくれたせいかお咎めなしになったそうです。しかしその教授に2、3日軟禁まがいを受けたそうなのですが。

前にこの一連について彼に聞いたことがあります。

「あの文字列かい？いやただの落書きだよ。ちょっとした悪戯さ」

などと悠長にタバコをふかしながら答えました。ただの落書きに教授が夢中になることがあるのか、やはり意味があるのでしょうと問いただしても、彼はただ笑っているだけでした。

またある日の昼ごろ。私の前に現れた彼は「腹が減った」と笑いながら言ってきました。ならば学食に行こうと誘い二人で学食に向かったのです。

「学食のうどんは安いよな。しかしまずいよな」

「そうだね、基本的に味を期待はしていないよ」

「しかし、そこがいいんだよな。うん」

などとケラケラ笑って、まずいうどんこそ学食の真髄とかなんとか言って大量のきつねうどんを注文しました。到底一人の人間が許容できるうどんの量ではありません。

「いやーしかしまずいな。食えたもんじゃない。しかしそこがいい」

と貶しては褒めて、うどんをかっ食らっている彼の姿を傍で見ていましたら、どうにもこっちが満腹を覚えてしまいました。見ている側が満腹になるということを実感した瞬間であったのです。

なにやら注目されているなと感じたとき、Hの前に巨人と言っていいほどの大男が立っていました。

Hも気配を感じてどんぶりから顔を上げ、大男を見上げました。

「ふむ、貴殿が学食界隈に名を轟かすうどんの神か？」

「いかにも・・・」

大男は答えます。図体からは考えられないぐらいの高音ボイスでありました。しかし意味が分かりません。と思っても彼と行動を共にして、「意味」を求めてはいけないのです。「理解」をしても「意味」がないのです。

「私がお前の前に顕現した理由は分かるな？」

「当然」

「ならば始めよう」

低級の神が顕現なされて何が始まるのであろうか。「意味」を求めてはいけません。「理解」は「意味」を持ちません。

静寂の立ち込める昼時の学食は異空間でありました。しかし私もさすがに彼に慣れてきたせいか、傍で学食のまずいラーメンを啜るのです。

学食のシフトリーダー、松原さん(４０代女性)がうどんをどんぶりをもってやってきます。名前はネームプレートで知りました。

「あんたら残したらただじゃおかへんで」

おかしな言い回しをする松原さんですが、その裏に隠された怒気にはただならぬものを感じます。
松原さんがどんぶりを両者の前に置き、
「う、どーんッ！」
どーんッ！と「第〇回春季恒例うどん大食い大会」なるものが始まったのです。

その後、この日の記録(大食)は歴代記録を塗り替え、Hは栄誉ある「うどんの神」となったのです。
ちなみに旧うどんの神はこの日泡を吹き出して意識不明の重態になり、集中治療室に閉じ込められる羽目になりました。大学側は「これは殺人未遂である」と躍起になってHの身柄を確保。やんややんやの大騒ぎになったのですが、学食のシフトリーダー松原さんが責任をとって辞職したことにより無罪放免。
この日のことを振り返るたびHは「いや、やはりまずかった。しかしそこがいいんだよな」と繰り返すのです。

彼はこれ以外にも数え切れないとんでも所業を繰り返し、大学側ともめにもめたのです。しかしなぜか彼は大学を追い出されることもなく、日々様々な奇想天外を私に見せてくれたのです。私の目は魅せられてしまったのは言うまでもありません。
彼は私になにかを求めているわけでも、強いることもありませんでした。しかし、なにかを相談したり、共に珍妙奇天烈な所業を共にすることもありませんでした。ただ共に過ごす、彼がなにかをして、それを傍で観察する、そんな間柄を果たして「友達」と言えるのか。時にふと疑問に感じることもありました。
「君は僕を理解してはいけないのだよ。人間にはそれぞれ許容できる範囲があるからね。人が人を理解するのは難しい。しかし理解できないから傍にいてはいけないということはないんだから。私も君を理解することは難しい。だけど君は僕の友達だ」
と彼は私に言ったことがあります。難しく考えるより、なんとなしに感じる方がいいんじゃないかと。そんなこともあって、平凡で俗物な私であったのですが、彼の友達であったのです。

彼は学力も抜群にありました。彼には失礼ですが、天才と馬鹿は紙一重と言いますか、学力の底力あっての奇天烈行為には一部の教授が脱帽していたのです。これは先の「数式事件」で一種垣間見れたことであります。彼の有する学力的観点からして大学側も苦い顔だけしかできず、行動による措置がとれない状況であったと言えるでしょう。
「私は決して天才ではない。それなりに独学ではあるが勉強はしている。努力の賜物だよ」
と彼はまたケラケラ笑ってはタバコの煙をふかします。
「しかしこのようにタバコを吸っているせいか、脳内が煙でいっぱいなのだ。だから馬鹿でもあるんだよ」
と大笑いをする始末です。しかし、彼の学問への傾倒というものに興味があった私は、彼に勉学の術を聞いたことがあります。
「いや君なんてことない、本を読んでいるだけだよ。読んで書く。それだけ」
紫煙をたゆらせ彼は笑います。しかし、彼の読書量にもやはり目を見張るものがあったのです。
とある日、数日間彼の姿を見なかった私は構内を探し回っていました。そのとき、なにやら図書館の方で騒ぎがあったので向かったところ、やはり騒ぎの中心にいたのはHでした。
近くの人になにがあったのかを聞いたところ、Hが勝手に図書館の中に家を作って数日間そこにこもっているという話でした。
家を作るとは流石に訳がわかりませんでしたが、実を知ればなんてことない。図書館の本を大量に積み重ねてスペースを作ってしまったということでした。その本の量ときたら、膨大な図書館の本の三分の一は使ってしまったとかなんとか。
丁度騒ぎの中、連行されるHを見つけました。両脇から警備員に抱えられ、ボサボサの頭で両目は寝ていないのか充血をしている風体でした。連れて行かれているのにも関わらず両手で本を広げて読んでいるため、ズルズルと引きづられ事務室に連れて行かれました。しかしそのとき読んでいたのは表紙に可愛らしい女の子キャラクターが描かれたものでしたので、彼の濫読っぷりに驚かされたのです。
「いやね、僕は一度に大量の本を読む人間なんだ。けっこう読むペースも早いからね。そんなに大量の本を一度に貸してはくれないだろう？だからその場で読むしかないんだ。で、読んで元に戻すのが億劫でね。ついつい積んでいってしまったらあんなになってしまった。本に囲まれたスペースっていうのは落ち着くんだよ。君もやってみるといい」
後日いつものように笑いながら話すHでした。
「色々読んでみたよ。学術書から先に読み始める。これに関しては憶えるためにちょっと書いたりするからね。

先にどんどん読んでは書くのさ。その後小説を読む。現代文学から古典文学までなんでもござれだよ。物語はいいよ物語は。ページをめくるのが楽しくてしょうがない。あと今回は料理本とか読んでみた。いやはや読んでいたら空腹になってしまってね！ハハハ。今度僕が手料理をご馳走しよう。レシピはいろいろ憶えたから、実践してみたいところだよ」

彼は目を輝かせながら語りかけてくるのでした。読んでみたものから僕に何冊かオススメしてくるから中々興味欠かない話なのです。

「え、最後に読んでいた本？ライトノベルだよ君！ジュヴナイル小説だよ。現代日本のファンタジーだよハハハ。読みやすくておもしろいよーいや今の図書館にはこんなものまであるのかと思って。僕実は妹萌えなんだよ、アハハハ！」

それから延々と妹理論を聞かされ続け、何かに目覚めてしまった気がしないでもなかったのです。

彼の話題は事欠きません。実態不明の「大学自警団」との壮絶は攻防や、全サークルに体験入部事件、怪しげな政治団体へのちょっかい、屋上からの人力飛行・・・小さいことから大きなものまで様々な、奇天烈珍妙摩訶不思議。これは大学の外でも変わりませんでした。しかし、大学の外での彼の行動は私も知らないことが多いので、なかなか書き尽くすことができません。

彼が何週間か学校に姿をみせなかったときがありました。そのときの学校は喧騒の中にあってもどこか静寂と感じられました。事務員も警備員も大学自警団(実態不明)もあるべき日常を過ごしているような感じを見受けました。

ひょっこりと数週間ぶりに私の前に現れた彼は「同志飲みに行こう！」と声高らかに誘い、陽も高い時分でしたが居酒屋へ向かいました。

彼の本の濫読ぶりはすごいものでしたが、お酒の飲みようも乱れていました。

ビールを煽り、ハイボールを煽り、焼酎を煽り、日本酒に舌鼓、最終的にウイスキーの瓶を煽っている始末でありました。

「飲みたまえ飲みたまえ」

「そうら食べたまえ食べたまえ」

彼の飲みっぷりにこっちまで酔ってしまうところでしたが、彼が珍しく遊びに誘ってくれたのも嬉しく、ついつい私も無理をしてしまいました。

べろんべろんに酔った彼と私でしたが、まともに会話はできました。

「一体ここのところどこでなにやってたんれす？」

少々呂律が回らなくなっていた私です。

「ん？いや、なんてことない。家にほとんどこもっていたよ。考え事していたり、ゲームしたりしてた」

「その分学校が静かでしたよ。びっくりするほど・・・」

「それ君、私がうるさくしてるみたいではないか」

「いや騒ぎ起こしているのはあなたでしょう・・・」

「ふむ。そうか。そうなのか・・・」

「で、考え事してゲームして・・・なんかありました？」

「なんか。か・・・聞いてくれ君、エロゲーというのは非常におもしろいぞ。あれはまずいな、人をダメにする要素がふんだんに盛り込まれているよ。本とはまた違った物語のおもしろさがあるな！」

「エロゲですかぁ・・・」

「うむ。こう本だと厚みで物語の終焉が見えてしまうじゃないか、視覚的にさ。しかしエロゲーというものは先がどこまであるか分からないからわくわくするな。こう股間もわくわくしてだな・・・」

「よくわかんないです・・・」

「今度君にも貸そう。妹ときゃっきゃうふふできるゲームをね」

「ありがとうございます・・・で、一体あなたは・・・なにがしたいのですか？・・・」

「ううむ・・・難しい質問だな・・・」

もはや自分でもなにを聞いているのかよくわかっていませんでした。ただ、彼が今までやってきた所業の一つ一つ、無意味とも馬鹿とも奇天烈ともとれるあまりにも大げさな行動の一つ一つ、それぞれ単体では意味を持たなくても、総じてみればすべてに意味があるのではないかと疑問に思ってしまったのです。理解することは難しい、しかし人はどうしても知りたくなってしまうものなのです。だから、彼の、Hがなぜこんな所業をするのかやはり

知りたくて仕方がなかったのです。
彼を知ることは禁忌とまでは言いませんが、禁忌とか禁止とされるもの、拒まれれば拒むものほど知りたくなる、怖いもの見たさ、そういった概念で私は彼を知りたくなったといえるでしょう。
彼はしばらく口を閉ざし、ウィスキーを煽ってから口を開きました。
「どうしたいのか、なにをしたいのか、それは私にも分からない。明確な目的などない。やりたいからやる。ただの欲求なんだよ。欲求を満たしたいから行動する。人間の行動原理の根幹だろうこれは。そんなもんだよ。単純さ」
「しかし、学校でなにがしたいのですか？むちゃくちゃにしたいとかですか・・・・」
「別に迷惑をかけたいのではないんだけどなー結果的に迷惑をかけているのかもしれないが。僕は大学に求めているものはなにもないのだよ。ただ大学という空間で、大学という期間で、このモラトリアムの小宇宙の中で、やれることを、やりたいことをやるんだよ。考えてもごらんよ。大学にいる期間、時間の経過ってとっても歪に感じられないか？学校なのに、自分は子供でもなく、しかし大人でもなく。一種世界から隔絶された空間であり時間なんだよ。自由が利く。子供でできないことができ、大人で許されないことができる。一種の無法。自由の横行。そう思うと自由とはなんと罪深いことかアハハハ。しかしまぁ君、そんな一種自由な空間と時間にぽつんといると自分がなんと小さい存在かということを感じてしまうんだよ僕は。僕は普通が嫌いだ。嫌いとまでは言わないが、普通にいるのがどうしようもなく居心地が悪いんだ。しかし、現状をみると自分はいかに小さい個であるか！そんな小ささをこの小宇宙で感じてしまうんだ、この先の人生自分がどうにも小さい存在になってしまうかは明瞭なんだよ。実にいたたまれない。この現状を、この自分の個をなんとかしたい。現状の打破を考える。しかしなかなかに難しい。だから現状からの脱出、逃避を試みる。そんなことの繰り返しさ。堂々巡って元に戻る。自分という人間を自分でいかに考えても、堂々巡りもいいところだなー私はいつも堂々巡りだ・・・」
彼も相当に酔っているらしい。言いたい事をぶちまけているが、理路整然とはしていません。しかし、人の考えとはこんなものでいいのではないか。曖昧で、不明確で、矛盾だらけで。だから人間というのはおもしろいのである。
「・・・つまり貴方は『特別』でありたいのですか？・・・」
彼は考え込み、そしていつものように笑った。
「アハハ、そうなのかもしれないね」

酔っぱらい二人が夜道を歩く光景は傍目から見れば迷惑千万でありましょうが、酔ってる当の本人達というのは非常に気分がいいものです。
Hもさすがに泥酔の域に入ってきたのでしょうか、ふらふらと右に左に鼻歌交じりに歩いています。
「同志、今宵は非常に気分がいい。そうら空を見てごらん。とっても星がきれいだ」
「なにを言っておりますひゃ、うッく・・・本日は曇りでございますどうすぇ」
「君には見えないのかね、この星空が。三等星だろうが四等星だろうが私には識別がつくよ！」
「あまり正座には・・・星座には詳しくないですぇ」
「君はUFOを信じるかね？」
「半分半分ですぇ」
「こんなに広大で輝かしい神秘！私はUFOを信じているぞ！そっちのほうがおもしろいからな！」
「好きにしてくらしぇ・・・」
「同志！今宵はなんでもできる気がするよ！さぁ、UFOを呼ぼうではないか！」
「・・・・」
彼はどこからか消火器を持ってきました。もうなんでもありでした。不思議に思うことをやめました。
「今からこれでサインを作るぞ！UFOとの交信、ならびに発着場を記す！」
「すきにして・・・kぅらし。。。」
「どっかーーーーんッ！」
Hは陽気な掛け声とともに消火器を噴出し、なにやら模様を描き始めました。でたらめに描いているようで意味をもっているように描くからこの人は非常に性質が悪いのです。
しかし、どうしても消火器から噴出される白い物質ではろくに描けず、中途半端な模様を描いて出し切ってしまいました。
「こいつは参った！非常に参った！」
「あぁ・・・ああ・・・」
酔っぱらいの悪行とは性質が悪いこと迷惑千万であります。
「同志ッ！代替塗料はないか！もうちょっとで描けるんだ！」

「どう見たって描けてないじゃない・・・ですかぁ・・・」
「君、第三の目で見て描くんだよ！両目の視覚なんざ無に等しいッ！」
「知らない・・・す」
「こうなったらドラ〇もんッ！」
未来世界のネコ型ロボットの名前を出して、己の股間を勢いよく露出させるHでありました。
「なにやってんすかッ！」
「しゃーーーーーーッ！」
とかなんとか言って勢いよく黄金水を射出する彼に私は幾分酔いを覚まされました。
「これで描けるッ！」
「かけるちゃうです・・・うぉ、危ないッ」
孤を描いて射出するものですから、危うく被害を被るところでありました。
「ふぅ・・・これでばっちりだ！」
「キモチよかったですか？」
「ばっちりだッ！して君、なぜ消化器が？・・・」

その後、地面に腰を下ろす酔っ払いの二人。Hもアンモニアを放出したせいか、ずいぶんと酔いが覚めているようでした。
「随分と飲んでしまったな」
「そうですね・・・」
「なんだ、星見えないじゃないか」
「言ったじゃないですか」
夜風がとても気持ちいい季節でした。寒くもなく暑くもなく。こんな日に星を眺めることができたら何も言うことはありません。そんな心持でした。
「いやしかし君、星とはなにも上にあるものではないのだな・・・」
「え・・・？」
ほら、と彼が指差した地面には確かに星が無数に点在していたのです。
「星ですね」
「星だなハハ」
コンクリートの中の成分粒子がキラキラと輝いているのです。なんでしょうこれは。とにかく綺麗と感じずにはいられませんでした。
「これは星だよ。人は上ばかり見ていていかんな。下にも輝きはあるってことだ」
私はそんな彼の名前を呼びました。
「なんだい同志？」
「やっぱりあなたは『特別』な何かですよ」
「・・・ハハ。そうかーそうか」
いつものように笑いながら答えます。ケラケラとけして嫌味のない顔で。しかし静かな笑みをたたえて。
「・・・僕はとっくに外れていたのか」

これが、Hと最後に会った夜の出来事でした。

この後、彼がどこへ行ったのか、どうなったのか、それは大体の方々がご存知かと思います。彼が関わることは大抵騒ぎになりますが、あの事件はちょっと大事でしたからね。
私は彼はどこいても、いつになっても変わらない、あの笑顔でケラケラと笑っていると思っています。
もし叶うのならまたお会いして、私に奇想天外な所業を見せていただきたい。そして、酒を酌み交わし、今度こそ満天の星空の下、UFOなんかを呼んでみたいと、そう思っています。
最後になりましたが、最近Hから手紙が届きました。せっかくですので、その手紙の内容も書き写しておこうと思います。
そろそろ食事の時間です。だんだんこっちの食事も慣れてきました。たまにうどんが出てくるのですが、これまたおいしくないのです。しかし、それがまたいいのです。なんて。
よろしければお返事下さい。それでは。

Kより

Kへ

元気しているかな？手紙を書くのは久しい、もとい書く行為が久方ぶりだから難しいな。読みづらくなってしまうかもしれない、許してくれ。

こっちは元気にやっている。といっても身体的に快調であると言ったほうがいいかな。いかんせん娯楽がなくてねー日々退屈なのだよ。どうにも危険人物扱いされてね。世間の目は辛い辛い。大学ではここまで手厳しくなかったのだけどなーまったく参っちゃうよハハハハ。

あの酒を酌み交わした日以来会っていないことになるかな。月日が経つのは早いものだね。あれから随分と経ったね。私は変わっていないといえば変わっていないが、大分落ち着いたと周りから言われるよ。

大学にいた頃は、まぁ確かにやんちゃが過ぎたかもしれない。しかし、君みたいな静かな、落ち着いている人が近くにいた分、当時はやんちゃしたくなったんだよハハハハ。動が僕で、静が君、みたいな構図。けっこう好きだったんだー心なしか落ち着けるというか。当時はそうも感じなかったけど、今思うと僕も相当無茶していたなーハハハハ。

憶えているかい？いつだったか、うどんの大食いをしただろう？あの時倒れた大男、飯島っていうんだが、彼こっちの集中治療室に運ばれていたんだよ！なんだか懐かしくなっちゃってさー会いに行こうと思ったんだけど、あの時のことショックだったみたいであんまり憶えてないみたいで。うどん食べられなくなったみたいでさーそれに拒食症の診断されたみたいで。いやかわいそうなことしたと反省するよ。その前に僕部屋から出してもらえなかったんだけどねハハハハ。

最近やっと外に出してもらえるようになってさ、こうやってペンを握らせてもらえるのも奇蹟的なんだよ。どうにも危ないと思われていてさ。そこまで狂っちゃいないよって話だよ。

大学が懐かしいなーあそこはやっぱり自由だったよ。こんなとこと違って。そりゃ多少厳しかったけど、こことは段違いだ。楽園だったよあそこは。そう入れられたばかりのときは監獄同然だったからね。窓に鉄格子、扉に鉄格子。まったく僕は猿かと。確かに大学のときから監視対象にされていたし、常人から外れているんじゃないかっていう自覚はちょっとはあったけど。なにも檻に入れることはないんじゃないのっていう話ですよ。て、悪い愚痴ばかりになったな。何回も言っているが、最近は自由が利くようになったから大分楽だよ。娯楽が少ないんだけどってさっき言ったかハハハハ。

僕は君のことを大事な友人だと思っている。今まであまり口に出したことはなかったけど、こう書面上なら言える。数少ない友達だよ、ありがとう。

大学の時、君がそばにいなかったら僕はもっと早くにおかしくなっていたと思う。結果的に外れてしまったけど、それでも君には感謝している。君が僕の一線を守ってくれた。なんだろう、君が驚いたり、興味を示してくれるのが実はなによりも嬉しかったんだ。だから色々と君からすれば無茶とも見える行動をした。その一つ一つに意味はあったのかもしれない。君を喜ばすため、君が友達でいてもらえるよう「いい格好」をみせたかったのかもしれない。それに、そんな一つ一つのおかげで僕は一度に外れることがなかったんじゃないかな。結果的にみたら、ただそれが遅かっただけのことだったんだけどね。こればっかりはさ、僕は自分ではどうにもできないんだ。そう、

―僕は狂っているから。逸脱しているから、普通とは。言わずもの話だけどハハハハ。

そんな僕が、内に爆弾を、いや怪物を秘めている僕が普通あそこに行って、自由が利く生活ができるわけがなかった。たぶん一種の実験だったんだろうね。野生に放ったらどうなるかみたいな。

たぶんすぐにでも檻に戻すつもりだったんだろうけど、君と友人になれたおかげで幾分か普通でいられた。大学の奴らはみんなして僕を腫れ物扱いしたけれど、それでも最悪の事態や大事には発展しなかったから、安心していたと思うよ。そのおかげで僕は君と幾月かの自由の日々を過ごすことができたのだから。

ただ、あの日、酒を酌み交わして、星を見たとき。あの夜がちょっとまずかったかな。

君が僕に自覚させてしまったから。外れていることを、特別視してしまったから。

まぁ、僕も油断したというか、しかしこればかりは自分でもどうしようもなかったからな。

それでも君には迷惑をかけてしまった。大切な友人に牙をむいてしまった。

僕は狂っている。どうしようもなく。悔しいぐらいに。

その後のことは、記憶にないんだ。なにがどうなったのか。気づいたらここさ。ただかすかに思い出すんだ、両手の紅蜀が。事実は後に聞かされたのだけど。

久々に君に、文字を通して話ができるのに、こんなことを書いていて、自分でもよく分からない。懺悔のつもりなのか。許しを求めているのか。
だけど、君に対してきちんと向き合いたいと思った。きちんと自覚して、そしてまた、

―こんな僕でよかったら友達になってほしい。

まだしばらく会うことはできないだろうけど、いつかまた会える日が来たら、友達として、同志として、酒を酌み交わしたい。星空の下で、ＵＦＯを呼びたいと思うよ。ハハハ。
もう一度、ごめんさい。そして、ありがとう。
それでは、また。

追伸

入学当初の「ツインテール事件」憶えているかい？君、前僕に聞いたよね、なんであんなことしたんだって？
いやただ、あの年で、実年齢が３０歳越えた女がツインテールにしているのが許せなかったんだよ。
身体は小さかったけどねハハ。
ツインテールって妹属性じゃない？ほら、僕って妹萌えだからさ。
そんなところさ。

Ｈより

２０××年７月１４日

〒１４５―■■
○○県▷▷群□□町１―４―３
※※※中央病院精神科病棟３０５号室